山道高嶺の殿

雪中過嶺の理由

身を鞍上に縮めて風間を候す

印度の寶庫、カシミヤの大森林

三、 風雪を冒してゾジラル嶺を過ぐ

二十四日、午前八時十分雪を冒して發し、十時三十分ゾジラル嶺に向ひ、正午十二時全く通過し畢れり。嶺は實に海拔一萬一千三百尺、之を山道高嶺の殿とす。斯る。高嶺を超ゆるに當りて、途中俄然の降雪は兎に角、既に前日來の雪天に拘らず、之を冒すは冒險の嫌なきに非らざるも、之を爲すに故あり。蓋し該嶺は降雪度を重ぬるに從ひ、次第に超過容易らずと聞くに因り、是日風の微なるを幸に發途したり。穏かなる雪天も道に嶺頂吹雪を起し、唯さへ空氣の稀薄、呼吸の促迫せるに、凍風雪を捲いて驀然として至り飈々聲を成し、寒氣骨に透る。馬爲めに進み得ざるもの數回身を鞍上に縮めて、風間を候して進みたり。昇降坂共に緩にして、殊に降坂は新に開設したる中腹道にして、幅二米突許山は綠泥岩多く、嶺南に樺、松、楊柳、樅落葉松と、此順序に依て漸次に茂生し、愈々下れば愈々鬱蒼、遂に全山悉く森林と爲る實に印度の寶庫たるカシミヤの大山林とす。時しも降り積る六花は翠綠と相映じ、天下の壯觀を極む。況んや沙漠に厭き禿山に倦みし予が、一朝此の絶景に對し、端なくも山紫水明の故國を想起し、萬感一時に催して、手綱取る手は何時しか緊縮し、心なき駒は其蹄を停めたり。松は概ね三葉、六葉、其の二葉のものに至つては極めて稀に、而も幹直くして、遠く之を望めば恰も杉の木立に似たり。

午後二時四十分、ソナマリキの官店に投ず。行程約二十二哩、此地は人家七戸あり。五時過る頃、駄馬始て到着す。蓋し雪の爲めに後れしなり。氣溫午前三十度、午後驗計を缺く。

「バアルト」人とカシミヤ人

四、 山中の活達磨

二十五日午前八時五分發、同四十五分一小部落を、同五十六分橋を過ぎて、溪流の左岸を南下し、十一時五十分更に橋を渡りて、右岸を下り、十二時三十分の頃より人家耕地斷續の地に入り、午後一時五分、行程十四哩を以てゴーンに入る。人家約二十戸あり、此地には官店の設け無きに因り久々にて幕營に着く。沿途衝羽根、樫、柏胡桃特に多く、且つ其他の雜樹茂生す。地質は綠泥岩に、硝子石を混す。此日氣溫は午前二十五度、午後五十五度を示せり。

土民中總髮を短く垂るゝは、『バァルト』人にして『ボット』人とは別種族とす。該人種はカルギル以西、ブンザ以東の山中に多く住すと云ふ。沿途山中なるカシ

ミヤ土民の服裝は、纏頭の女子服に酷似して少しく寛に、且つ短きものを着し下方に一の横襞ありて、男女同樣甚だ見苦しく、女子は白布の頭巾鼠色になれるを被り男子は椀形の帽を冠す。

予は未だ達磨の眞相如何を知らずと雖も、一般に描かるゝ樣を以てすれば、實にカシミヤ山中の土人は擧て活達磨たらずんばあらざるなり。予初めて彼等を觀るや、頗る奇異の念に堪へず、心中覺えず活達磨と呼べり。其の狀貌と云ひ、服裝と云ひ、而も腹部に一段の突起するものありと云ひ、縱横熟視すれば熟視する程、正に活達磨たらずんばあらず。獨り奈何せん達磨は偉大なる人物たるに因りて、脫俗清爽、威儀堂々たる裡、慈眼溫容を備へたるに反し、此れは無智無識の一蠻族なるが故に、粗野鄙陋固より語るに足らざるを。されど大體其形に就て云へば正に活達磨たるを失はず。況んや彼等習慣の携帶爐を股間に挾みて路傍に蹲踞する狀の畫樣に酷似せるに於てをや。

カシミヤ人の手工

氣候の關係は、大體印度をして裁縫の術に長せしめず。之に倣ひしカシミヤ人種は蠻族なるが故に爭でか物を進歩發達せしめんや。其の印度より寒冷の故に困りて、彼の纏綿的衣服に代ふるに、僅に襦袢形の粗服を作り出せしも、未だ袷に製し、綿を入るゝの法を知らず。是に於てか其の寒冷を防がん爲め、彼等が畢生の才能を搾りたるもの即ち彼の携帶爐なり。這は長き手を有する小さき籠の中に、土製の火入を容れ、終始之を其の股前に提げ、僅に溫を取りて寒を防げり。嗚呼活達磨縱ひ蠻的の然らしむるも、佛緣淺からざる此地に於て、斯る狀貌に接するは亦奇なりと謂はざるべけんや。

家屋は木材及石を以て造り、疎粗防寒に適せず。但し此附近は冬季至て短しと云ふ。

二十六日午前七時四十分發、八時四十五分一橋を過ぎて左岸、九時三十分復た一橋を渡りて右岸を辿り、正午十二時カンガン（人家約十戸）を經午後二時三十五分又復た一橋を通じ同四時二十五分行程約二十四哩にしてガンダルワに着す、人家十三戸に過ぎず。沿途山は依然松樹多く、間々蒼楓及果樹を交へて繁茂し、部落相望み、米田多く、始めてスリナガルの廣野に出でたり。氣溫午前三十四度、午後五十五度。

五、 スリナガルの「ハウス、ボート」

二十七日午前七時四十分發、路は東南を指して平坦、西南は一帶沼澤地に屬し、部落相連り、人家次第に多く、十一時三十分、行程約十二哩、スリナガルに達す。予は市街を縱貫して、居留地ハリシンバック街に到り、先づ英國駐在官大佐ヤング、ハスバンド氏を其の官邸に訪問せり。大佐は千九百〇六年、西藏遠征隊長を以て、中外を轟かせし人、嘗て其の大尉たりし時、滿州、蒙古、新疆横斷の大旅行を果せし人、今や重任を帶びてカシミヤ王國の首府に駐在す。大佐身長高からざるも、能く肥滿し、溫乎たる狀貌、諄々たる言語、親しむべく、敬すべく、道に有名の遠征家丈け、少からぬ同情を以て予を迎へられしを感謝す。予は副官の言に依り、稻垣中佐の未着を確め、辭して「ハウス、ボート」（幅十尺長さ八十餘尺、船内居室、食堂、寢室、浴室等に分ち外に小舟二隻を附屬す。一は厨夫用、他は遊覽用とす）に投宿せしが、日將さに暮れんとする頃、孟買なる藤田領事派遣の原雀麿氏（喀什噶爾より該領事に發信し置けり。是に於て領事は氏を送りしもの蓋し氏は有名なる慈善家原胤昭氏の次男年齒僅に二十歲、商業視察の爲め深く印度内地に入り、土人と起居を共にし、當時印度語の研究中なりと。溫厚着實、將來有爲の一青年とす）の來訪するに會ひ、相見て歡然恰も舊知の如し。時に船傍人山を築く。蓋し此地日本人を見ること甚だ稀なればなり。而して其夕刻原氏に導かれ、特に予が爲めに準備せる「ハウスボート」に轉宿す。

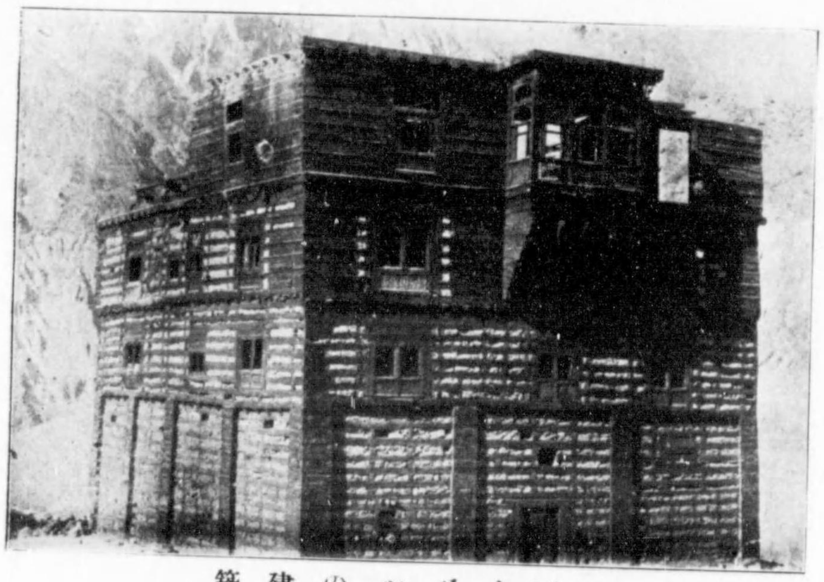
ヤング、ハスバンド氏と語る

原氏と會合

カシミヤの山林

同上

ルガナリスの全景



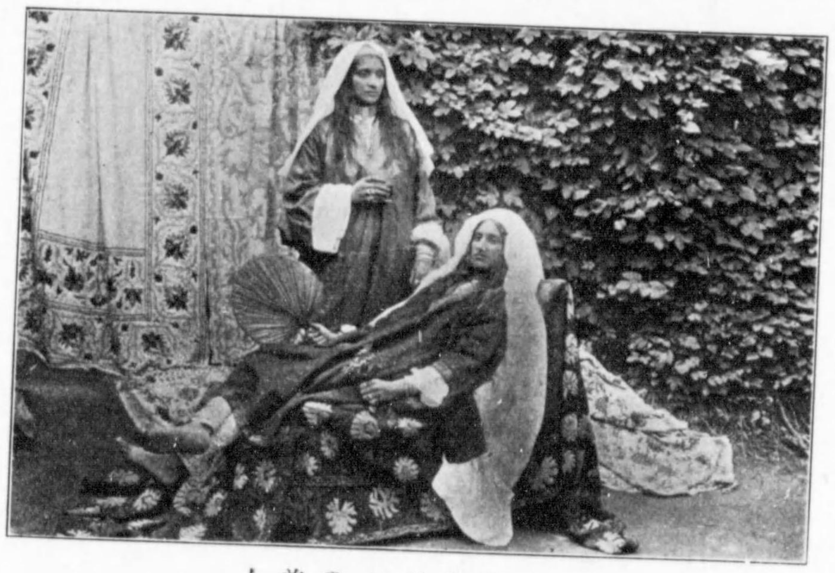
ルガナリスの建築

ヒマラヤ山中に住むカシミヤ婦人の服裝
（水を運ぶの圖）

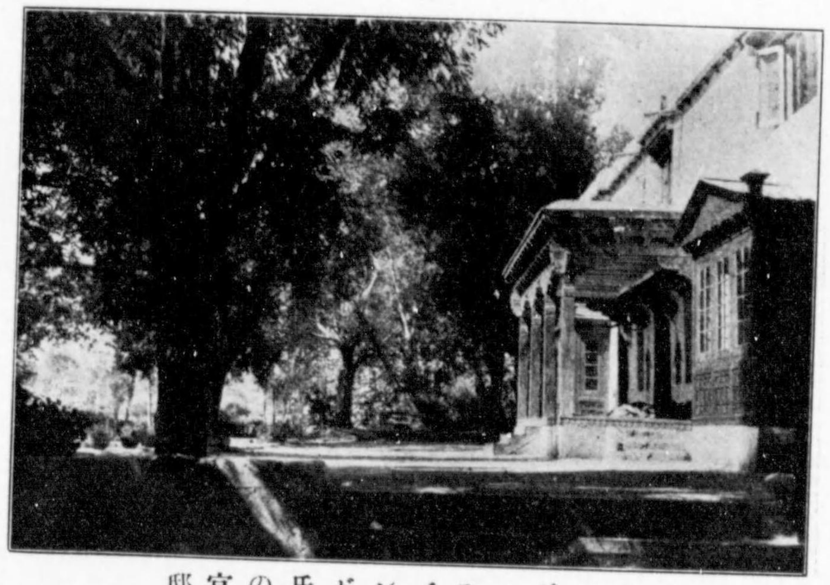
俗風の人トルアバ

俗風の人トルアバ

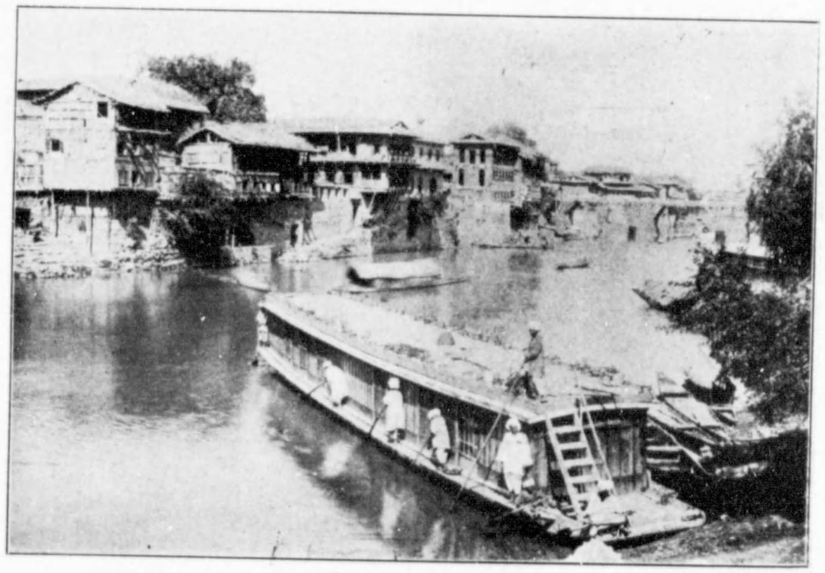
カシミヤ王國の將校



人美のルガナリス



ヤングハスバンド氏の官邸



トーボスウハ

スリナガルはカシミヤ王國の首府にして、漢書に罽賓國、善見城と稱するもの即ち是なり。市街はゼェルム河に跨り、戸數二三萬、人口約十二萬、有名なる「マハラジヤ」宮殿は市の東北部に聳立し、黄金塔高く殿上に燦然たり。其周圍殊に西北部には商家甍を連ね、往來織るが如く、大小の河船舳艫相啣みて上下し、水陸共に熱鬧せる一大都會とし、就中河岸に繫留する多數の「ハウズボート」は、當地の特有として注目に値せり。

スリナガルの狀況

「マハラジヤ」宮殿の黄金塔

抑もスリナガルはカシミヤ平原の中央東部に位置して、海拔實に四千餘尺、四面高峰（一萬五千尺内外）に圍繞せられ、自ら別天地を成し、山水明媚、氣候温和の樂園と稱せらる。されば印度各地より、毎年避暑客の麕集するもの無慮三千人に及ぶと。而して印度横斷鐵道を距ること、二百五十哩に位置し、其の最近の停車場をラワルピンデーと云ふ。蓋しスリナガルと同停事場間には、好良なる馬車道ありて、三日乃至四日にて達し得べし。

印度の樂園

六、佛顔の牛

曩には惡相の活達磨に接し、今此地に佛顔せる家牛を見たり。洵に好箇の對照

佛顔の牛

物とす。蓋し牛族は獰猛の獸類に屬し、就中臺灣に於けるものゝ如きは、實に猛惡なる相貌を呈し、觸れば將に突進せんとするに似たり。之に反して此地の家牛は溫顏實に佛の如く、其の愛らしき眼、其の穩かなる狀貌は、實に特長と稱すべし。然り彼等の能く是に至りたる所以は、元來ヒンヅー(カシミヤにはヒンヅー少きも印度全體より見れば之に反す)人は牝牛を以て神に配し、束縛緊留は愚か、丁寧親切を越えて崇重尊敬至らざるなし、是に於てか、彼等は欲する所に歩み、又欲する物を取り食ふも、何人も之を叱咤せず。されば行くとして牝牛の徘徊せざる無く、徘徊するも決して人に害を及ぼすこと無し。唯牡牛のみは使用に充てらるゝも、牝牛既に神と崇めらるゝ程なれば、神の配偶なる者如何ぞ呵責鞭撻等を受くるの理あらんや。是れ一に彼をして溫乎たる佛相を示すに至らしめたる所以ならん、牛族も此の如き地に生れては、眞に幸福の物なるかな。

七　稻垣中佐と會合

二十九日稻垣騎兵中佐カルカッタより來り迎ふ。予喜びに堪へず、先づ原氏を紹介し、三人鼎座、快談湧くが如く、頓に異域の客たるを忘る。暫くして卓上杯盤を運び來る有り。出す所のもの悉く異羹珍膾ならざるは無し。蓋し原氏の厨夫に命じて、調理せしめたるカシミヤ料理なり。中佐其の携へ來りし「正宗」三瓶を出して曰く。既に肴あり、焉んぞ酒なかるべけんや。粗酒素より以て君が大旅行の成功を祝するに足らずと雖も、予が微意の存する所を酌むで、積日の勞を慰するを得ば、予の本懷何ものか之れに加えんやと。予感喜措く能はず、唯慨むらくは性來酒を解せざるを。然れども骨肉尙ほ及ばざる中佐の好意に對し、爭でか辭するに忍びん。況んや天涯萬里の外に在りて、我國製の酒を齎せるをや。即ち一策を案じて曰く、『君が厚情謝するに辭なきも、今日之を傾け盡すは、聊か遺憾なき能はず。幸に天長の佳節は數日の後に在り。惟ふにペシャワールに向ふの途上に於て之れを迎ふるならん。萬里の異鄕に在りて、同胞三人、故國の銘酒を得て　聖壽の萬歲を祝す、亦樂しからずや。願くば正宗の一半を携行せん。且つや予に我國製の罐詰二三の貯へ有り、實に此の盛事に供用せんことを期せしものとす。諸君以て如何と爲す』と。皆曰く善哉々々。中佐乾杯予に勸む、予已むを得ず酒量なきを明かす。中佐予を諦視して曰く看板に僞あり君の容貌を以てすれば、數升を傾くるも

「正宗」三瓶

看板に僞あり

尚ほ辭せざるの風ありと。中佐更に杯を原氏に擬す。氏も亦酒味を解せず。由佐曰く『予の酒に於ける何そ夫れ多福なるや』と獨酌滿飲、一座相見て哄笑す。

八、伊犂以來の乘馬と別る

三十日、稻垣中佐と共に大佐ヤングハスバンド氏を訪問せんとす。然るに同大佐は、昨日ジャンムーに避寒せり。因て副官某大尉を其官邸に訪ひ、予か乘馬を大佐に寄贈せんことを依頼せしに、副官之を快諾したりき。該乘馬は既に記せし如く、伊犂副都統より惠贈せられし喀喇沙爾の產にして、骨格逞しき蘆毛の駿馬なり回顧すれは伊犂出發以來、天山に南路に、將た崑崙、ヒマラヤの峻嶺に、偕に共に寒暑を凌き難路を跋渉し、予か旅行の忠僕たり伴侶たりしも、今や無事に任務を果し既に歸朝の期に逼れり、情に於て之を土人の手に委するに忍びず、然れども之を我國に携行せんには、莫大の費用を要す乃ち已むを得ず茲に訣別せざるべからず。之を大佐に贈らは馬も其主を得たるを喜ぶべしと思ひしが、其不在を聞き一たびは落膽せしも、幸に副官の予が意を諒し快諾せる有り大に心を安んじたり。

旅中第二回の天長節を迎ふ

カイバル要塞の見物

第七章　スリナガル出發歸朝

十月三十一日午後二時半、予等一行『タンガ』（二頭曳二輪馬車）に分乘スリナガルを出發して、バラムラに一泊。

十一月一日、カリー一泊。

二日、テレットに一泊。

三日、正に天長の佳節に値ふ。朝起盥嗽、遙に東天を望みて、聖壽の無窮を奉祝し、三人卓を圍みて杯を舉ぐ。性來酒を用ひざる予も原氏も、是日ばかりは引滿乾杯して謹みて萬歲を三唱せり。畢つて出發し、午後五時ラワルピンデーに到着す、例に依り『ダックバンガロウ』に投宿す。

四日、鐵路西行ペシャワールに到る。

五日、滯在、師團長マロー將軍を訪ひ、カイバル要塞（印度と阿富汗の境）を觀るの許可を得たり。將軍は明治三十三年北清事變の際、印度兵を指揮し、連合軍に參加したる人、當時の記念として、我山口福島兩將軍の小照を壁間に掲げ在り。

六日、馬車を驅りてカイバルに向ふ。恰も好し是日印度軍總司令部參謀長マルテン少將、該要塞を巡視するに會ひ。同行の榮を得て、アリマスジットに到り、茲に少將と分袂してペシャワールに歸る。

七日、鐵路東進。

八日、ラホールを經てアンバラに到り、此に原氏と分袂す（同氏はデラドンに向ふ）

九日、デリー着。千八百六十七年印度叛亂の記念碑及當時の血戰場たるカシミヤゲート外に、ニコルソン中將の銅像を拜して、英雄興亡の跡を訪ひ、轉じて印度帝國全盛時の宏壯なる宮殿を觀覽し、盛衰轉變の極り無きに感ず。

十日、アグラ着。有名なる世界の建築、タヂマホール（陵）及キングアクバル（宮殿）を拜觀す。

十一日、ガヤ着。

十二日、ブダガヤに釋尊の靈跡を拜す。

十三日、カルカッタ着。飯島總領事の好意に因り、同官舍に滯在すること九日。此間稻垣中佐の懇切なる誘導に依りて、東洋一の稱ある動物園、植物園、博物館等を觀覽せり。

カルカッタ解纜の感想

スリナガル出發以來、一部は馬車、大部は鐵道旅行を爲したる故、幾多の見聞詳細の觀察を爲すこと能はず。否多少の管見なきに非ざるも、此地方は既に多くの旅行者に賴つて、普く世に紹介せられ、復た予の偏見禿筆に待つを要せざるなり。

十一月二十二日、午後六時、總領事館員、稻垣中佐、三井物產會社員、及其他の在留邦人に見送られ、アラトン、アブカ號（四千噸）に乘船。同行に安藤敬三君（孟買に在りて日本紡績聯合會の代表せし人）あり。

二十三日、午前六時、カルカッタを解纜す。顧れば予の大陸旅行中、親炙せし山河、今尙ほ腦裡に髣髴し、無限の感慨胸中を往來して俄に大陸を離るゝに忍びざるものあり。舷に倚りて遙に西北を眺むれば、茫として唯白雲を見るのみ。寄語す西部支那一帶の山河、其國家と共に健在なれ。

二十九日、彼南に寄港。

十二月二日、新嘉坡着。當地駐在井上少佐の案內にて、普く各處を觀覽し、殊に馬來半島の末端、ジョホール王國を見舞ひしを幸とす。此地滯在三日。

六日、日本郵船佐渡丸に乘船す。先客に藤堂伯、山口三等軍醫正、古川寅太郎氏、渡瀨博士、小森、小田川、岡本、村橋の諸學士あり。

十二日、香港着。小森、安藤兩氏と共に市中を散策し、更に「ケーブルカー」に乘して、一千八百呎の最高點に登臨す。予は上海に寄港するの要用ある爲め、佐渡丸の諸氏と別れ、再び「アラトン、アブカ」號に便乘す。

忠僕トクタと別る

十七日、上海着。永瀧總領事を訪問し、豐陽館に投宿す。此夕從僕トクタと別る。トクタは纏頭回民にして、支那語を能くし、伊犂綏定縣の巡警たりしが、予該知事に請ふて帶同す。爾來八ヶ月、勤勉忠實終始渝る無く、洵に得易すからざる忠僕なり別に臨み、新調の衣服と、外に百金を賞給して、從來の勤勞に酬い、且つ北京の知人に依頼し、伊犂に赴任する官吏に隨從して、歸鄉せしむることとせり。此地滯在二日、長園、愚園を觀覽し、日本倶樂部の會食に出席し、請に應じて旅行談を爲す。

全旅行の

二十四日、神戸着。先着の安藤君來り迎ふ。午食を共にし、鐵路京都を經、西本願寺に大谷伯を訪ひ、長安に於ける謝意を述ぶ。

二十五日歸京復命す。

日數と里程

以上明治三十九年九月七日、帝都を辭してより本日歸京迄、月を閱すること十有六日を經ること四百七十四、陸路壹萬零三百九十二哩、海路五千五百十二浬。

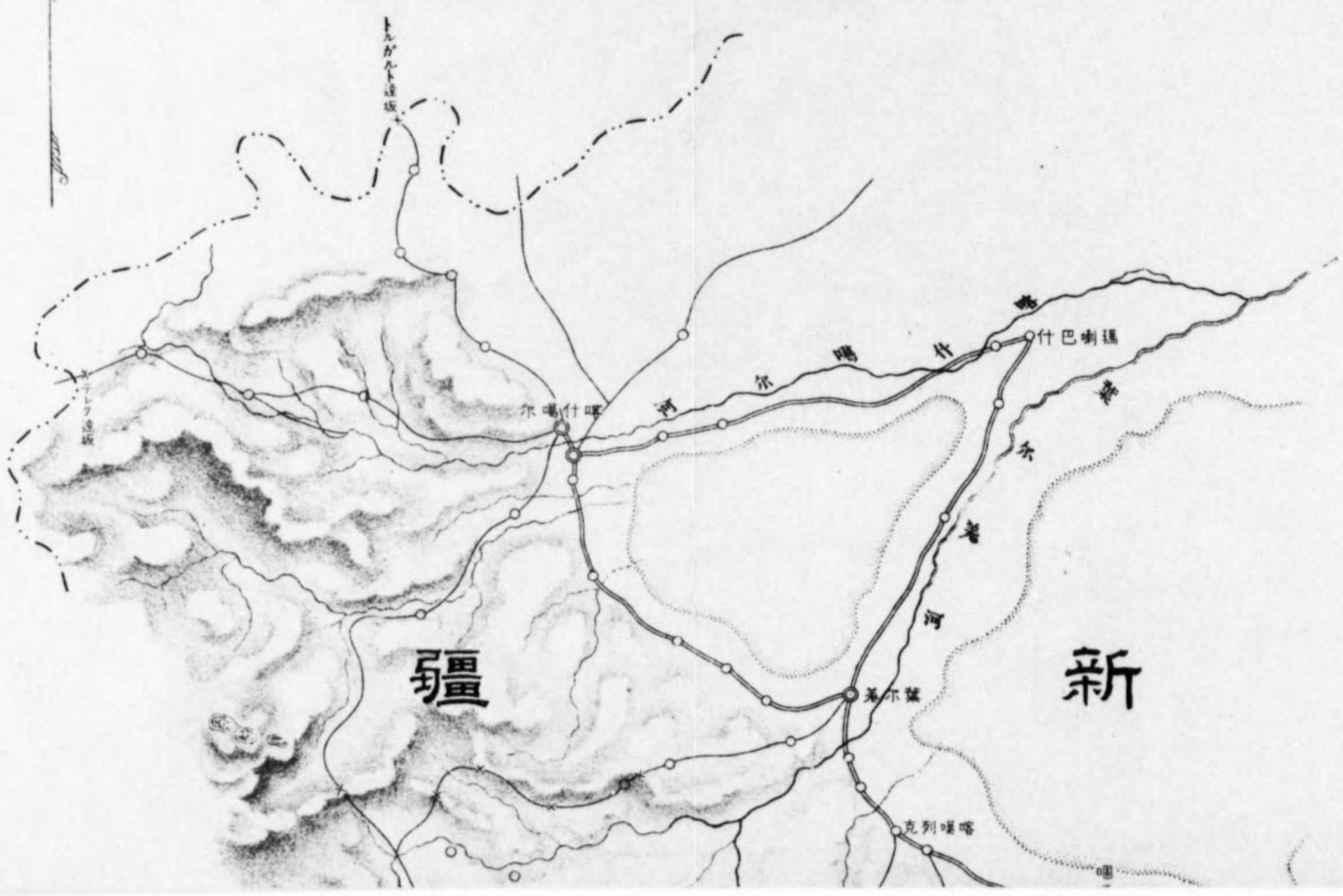
天山南北訪仙源　又越崑崙敲佛門
自笑俗緣猶未盡　再騎鼇背向鄉園

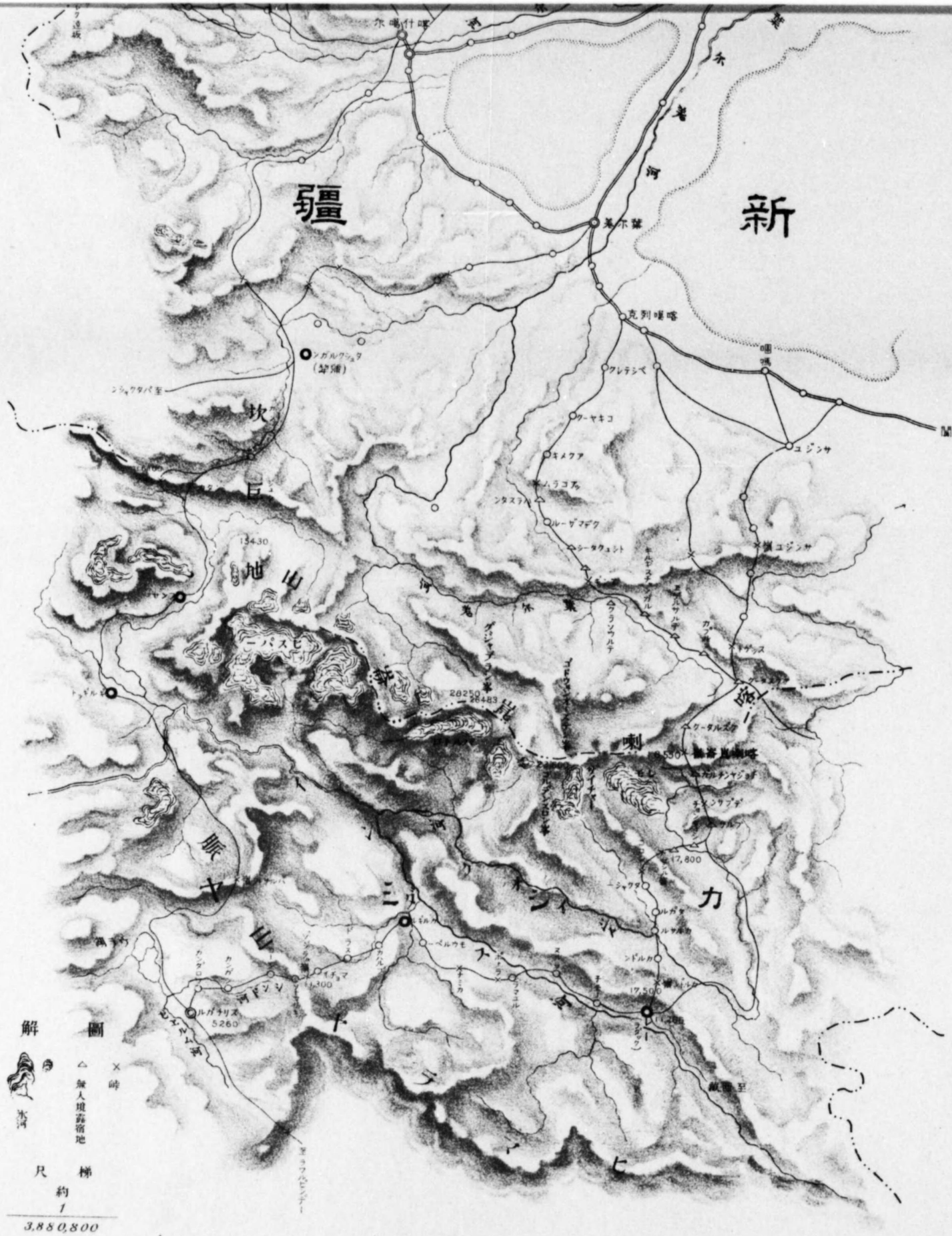
伊犂紀行 上卷畢

大正十三年十二月廿二日

小牧實繁

喀喇崑崙山道圖




新
疆
喀什噶爾
葉尔羌河
葉尔羌
克列嗄喀
嗄喀
至和闐
ユジンサ
クレチシベ
シンガルクシュタ
(碧雲)
坎
巨
地
山
13430
パスピ
河
葉
尔
羌
喇
嘛
17,800
17,500
ヤ
山
脈
ミ
ル
ス
ク
ン
ジ
ヤ
ル
カ
ン
ド
ル
カ
ヒ
ン
ド
ク
ル
ク
ラ
ス
ル
ガ
ラ
リ
ス
5260
解圖
尺度
約
1
3,880,800

明治四十二年五月廿五日印刷
明治四十二年五月廿九日發行

著者　日野强

發行者　東京市日本橋區本町三丁目八番地　大橋新太郎

印刷者　東京市小石川區久堅町百〇八番地　市川七作

博文館印刷所印刷
東京市小石川區久堅町百〇八番地

著作權所有

附奥卷上行紀黎伊

定價金壹圓參拾錢

發兌元　東京市日本橋區本町三丁目
振替貯金口座二百四十番
博文館

清人金國璞君校閲
吳泰壽君著
日清往來尺牘
全一冊洋裝中判紙數百八十頁
正價金參拾五錢　郵稅六錢

陸軍參謀本部員陸軍步兵大尉
平山久治君著
滿韓土語案內（實用珍釋）
全一冊洋裝袖珍美本
正價金貳拾錢郵稅金貳錢

元天津領事官補大使官三等書記官　奥田竹松君著
北清の商業
全一冊　洋裝大判美本　紙數二百二十頁
正價金四拾錢　郵稅金六錢

目次
○北清概誌○交通の狀態○産業の狀態○南北清の相違せる點○北清貿易論○天津の航運業○天津商業區域の消長○天津より北清内地に通ずる商路○天津略誌○天津の金融機關○貨幣○爲替相場並に其動搖の爲に受くべき危險の豫防法○商取引○買辨○清國人の好惡を論ず○商品に關する注意○貨物の荷造○詰合せ方等に關する注意○重要なる北清向き日本商品▲附錄……數項

滿洲起業案內
全一冊　洋裝三六判美本　紙數二百五十頁
正價金參拾錢　郵稅金四錢

衆議院議員大岡育造君序文
中央新聞記者岡田雄一郎君著

目次
滿洲の經營○滿洲の政治○滿洲の兵備○滿洲の農業○滿洲の商業○滿洲の工業○滿洲の鑛業○滿洲の生産力○滿洲の消費力○滿洲の輸出入○滿洲の盛衰○交通と運輸○吾人の覺悟

寫眞版目次
大連に於ける舊露國劇場○海城府全景○大連の電燈發電所○撫順鐵道○旅順附近の鐵道○大連のホテル○奉天の四平街○滿洲の森林○雪中の滿洲の山○瓦房店停車場○堆積せる豆糟○撫順の炭坑停車場○鐵嶺の市街○滿州の小兒○滿州土民の歡迎○滿州の紳士

發兌元　東京振替貯金口座　日本橋區本町三丁目二十四番　博文館

青柳篤恒君　中山東一郎君共編
清國漫遊案內
全一冊　洋裝中判洋布上製　紙數百七十四頁
正價金七拾五錢　郵稅六錢

▲附錄――長江沿岸略圖、渤海沿岸略圖、江南大運河附近水路略圖

本書は目下日清兩國彼我交通の頻繁に伴ひ渡清者の一小伴侶たらしめんとの目的を以て編者は清國内地に於て得たる見聞と各國種々の地理書並に在清帝國領事館の報告及兩國各地汽車汽船諸會社營業案内等精確なる材料を蒐集參酌して編纂したる者なれば渡清者は勿論苟も東洋の商業的競爭に志を有する者は本書を携帶精査すべきの要あり

東京　博文館發行　本町

香川悅次君著
支那旅行便覽

▲第一編　政治○中央政廳○新設官廳○地方官廳○特設官廳▲第二編　交通(上)○總說○無錫鐵道○杭州鐵道○滬松鐵道延長○結論▲第三編　交通(下)○長江航路○内河航路外數項▲第四編　實業○總說○日清通商起源○日清通商上の地方別○支那貿易事情外數項▲第五編　教育○軍事教育○新學の勃興○初等小學堂章程▲第六編　通俗社交▲第七編　神戸より上海○上海雜記○上海より杭州○杭州より蘇州○上海より漢口○漢口より長沙○湘潭と常道○漢口武昌雜記○東漢鐵道貫通記○北京雜記○北京より通州天津○芝罘より朝鮮、歸朝▲第八編　雜纂　其他詳細目數百件

全一冊洋裝三六判美本紙數五百九十二頁
正價金四拾錢　郵稅金八錢
名勝風景寫眞版數葉挿入

陸軍中將 福島安正君題字

清國駐屯軍司令部編

北京誌

全一冊

洋裝菊判總クロース特製金文字入美本 紙數九百二十餘頁

正價金貳圓五拾錢 小包料金拾貳錢

◎新版◎

▲卷頭——○北京市街詳密圖 ○北京城內外風景及風俗 寫眞版四十七種挿入

我が隣邦大清國は政治外交貿易の關係上我が國民の研究を怠るべからざる所なり而して之が首都たる北京の事情を知悉するは清國の大勢に通ずる捷徑たらんかの本書は清國駐屯軍司令部の編纂に係り紙數千頁尨然たる一大卷なるも內容は服部文學博士の幹理の下に清國精通の大家の分擔執筆せられたるを以て秩序整然條理明晰而かも調査精密に叙說周到北京上下內外の情況は此一書に於て盡せりと云ふも不可なし本書以前に本書なく本書以後亦た本書なしと斷言するを憚らず苟も政治經濟家は勿論東洋諸邦の研究に志ある士の必ず一本を備ふべき要あり

發兌元 博文館

農商務省商工局員 **德永勳美君著**

外務省通商局編纂

韓國總覽

全一冊

洋裝菊判上製總クロース金燦燦押美本 紙數一千五百餘頁 挿畫數十個 地圖五葉（大判石版數色刷） 寫眞版五十四頁（光澤紙摺） 正價參圓參拾錢 小包拾六錢

韓半島は帝國建國史上に於て由來密接の關係を有す而かも日韓協約の締結と俱に今や兩國の政治的連鎖成り國際關係益敦厚を加へり此際に於て我邦人が韓國の事情を詳らかにし彼我國運の啓發を計るは我國民の先天的義務にあらずや本書は著者が農商務省に職を奉じ多年韓國の事情を研鑽せる結果三星霜の長日月を閲みし漸く其脫稿を見るに至れり願ふに韓國に關する著書は從來甚鮮からざるも多くは一方に偏し全體の事情を網羅せるもの殆んど絕無と謂ふも過言に非るべし且つ同國政治上の變遷甚しきが爲め既往の著書は既に陳套に屬し或は實態と齟齬せるもの尠しとせず本書の內容は韓國に於ける總ての事項を網羅し各章を百八十八款百七十二項に分類し且つ所載の事項は可成的最新適確のものを採り綿密探討殆んど遺憾なからしめたり殊に農工商及一般經濟上に關する各項に對し最も意を置きたる所以のもの對韓經營の要義は一つに經濟的發展に在るを以てなり今や本書成るを告ぐ實業家經濟家は本書を以て韓國經營の羅針盤となさば便益を享くること必ず多大なるべきを信ず

最近印度事情

全一冊

洋裝菊判總クロース特製美本 紙數四百六十八頁 印度風俗寫眞版八葉挿入

正價金壹圓參拾錢 小包料金八錢

◎新版◎

目次

◎第一章——商業 內國貿易 外國貿易 貨幣 銀行 ◎第二章——農業 概況 穀桑 蠶業 要農作物 灌漑 地租 牧畜 ◎第三章——工業 製造事業概況 製造品 ◎第四章——鑛業 石炭 黃金 滿俺鑛石 鐵 雲母 石油 ◎第五章——運輸交通 鐵道 郵便 電信 電話河川及運河の運輸 ◎第六章——一般施政 印度政府 印度行政官 英國に於ける監督官廳及印度評議會 地方政府 印度陸軍 ◎第七章——軍事 ◎第八章——教育の概況 各地方役所 裁判所 市行政 村行政 ◎第九章——租稅 租稅の種類 地租 印度陸軍 ◎第八章——教育の概況 初等學校 中學校 大學 工業學校 美術學校 農學校 商業學校 農學校 法律學校 師範學校 醫學校 結論 ◎第九章——租稅 租稅の種類 地租 消費稅 關稅 所得稅 地方稅 印紙稅 印紙稅 ◎第十章——土人州概況 パロダ土人州概況 バロダ土人州施政大要 土人州貢金 阿片收入 鹽專賣 ◎第十

發兌元 博文館 東京振替貯金口座 日本橋區第二町百三十四丁目十番

法學士 勝部國臣君著

清國商業地理

全一冊洋裝大判
紙數三百四十六頁
並製正價金四拾錢
郵税金八錢
特製金五拾五錢
郵税金拾錢

本書は支那の通商貿易を始め列國の經營金融機關及度量衡交通機關を詳說し轉じて各商業地の狀態取引習慣風習等苟も支那貿易の爲めに資すべきの事項は悉く說述解明して剩す所なし而して本書の著者は大學院にありて專ら世界の通商貿易に關するものを攻究し又多年職を農商務省に奉じ支那に關する通商貿易を調査したるもの本書が如何に支那貿易に志す者の指導者たるかは問はずして知るべきなり

文學士 田淵友彥君著

韓國新地理

全一冊洋裝大判
紙數三百三十八頁
並製正價金四拾錢
郵税金八錢
特製金五拾五錢
郵税金拾錢

從來韓國に關する幾多の著述世に出でたりと雖も多く實業若くは政治に偏し未だ韓國の現在を學術的に解說したる地理書の完全なるものを見ず著者多年韓國問題を檢索し甚だ韓國の事情に通ず。本書は內外最も粹新の資料に據りて著述せられ韓國百般の現在的事態を最も明確に餘蘊なく說明したるものにして地理書として最も完全なるものたる而已ならず韓國問題を研究せんと欲する者に向つて所謂時勢の書として最良の參考書たり。故に學術的に韓國を研究せんと欲する者及び淸に韓國に一經營を試みんと欲する者は必ずや此書を手にせざるべからず

發兌元 東京振替貯金市日本橋區第二町三十四丁目百番 博文館

坪谷善四郎君著

改訂增補 日本漫遊案內

全二冊 洋裝中判總クロース
美本紙數千三百餘頁府縣廳所在地圖銅版附廿餘頁
▲風景寫直版八十餘挿入

上卷 東半部着色銅版精密大地圖挿入 下卷 西半部同上

正價一冊金壹圓——小包料一冊金八錢

大好評 上卷七版 下卷六版

本書は皆著者が親しく各地を巡歷して視察する所に依り大都名邑勝地舊蹟、神社佛閣、溫泉、浴場等の案內は言ふも更なり海山の形勝、水陸の交通、產業等の狀況、風俗の美惡、料理店、舟車の費額土物產の調進に到る迄盡く是れを詳記し傍ら歷史を說き古今の詩歌を挿み加之著者獨特の各地風景寫眞數百圖と各都市銅版密刻圖數十種を添へ別に上卷に東半部下卷に西半部の着色詳密地圖を附す凡そ地方に旅行する者は必ず一本を缺くべからざるは勿論一室內に在て之を讀まば坐がらにして名勝を知り山光水色自然の美景を賞するを得べき也

伊藤銀月君著

旅行者寶鑑

（全一冊洋裝三六判紙數三百頁）
正價金四拾八錢 郵稅金六錢

旅行の神髓を得たる點に於て孔代稀に見る著者に依り、未だ何人も試みざる旅行者の寶鑑を供せられたるものは本書也著者の人物と文章とを知れる人には唯だ目次の大要を瞥見したるのみにて、其の讀まずして已むこと能はざる古今の珍書要書たるを信じ得らるべし。「旅行の種類に就ての心得」「旅人の種類に就ての心得」「同伴の種類に就ての心得」「旅行の土地に就ての心得」「旅行の方法に就ての心得」「旅行の委細に就ての心得」「旅行の場合に就ての心得」「旅中の食物に就ての心得」「旅中の宿泊に就ての心得」「旅中人と交涉する心得」「旅中の病氣に就ての心得」「旅中の變事に就ての心得」此中總計百七十九題を含み、一々緊要にして類別整然たり

東京本町 博文館

紀行書類

- 鎌田榮吉君著 **歐米漫遊雜記** 全一冊洋裝中判 紙數四百二十四頁 正價金四拾錢 郵稅金六錢
- 大橋乙羽君著 **歐米小觀** 全一冊洋裝小判 紙數三百六十二頁 正價金四拾錢 郵稅金四錢
- 河口慧海君著 世界の秘密國 **西藏旅行記** 全二冊洋裝大判 紙數八百九十頁 一冊金壹圓 小包料八錢
- 巖谷小波君著 小波 **洋行土產** 全二冊中判新形 紙數八百四十頁 一冊金二圓廿錢 小包料金八錢
- 賜覽天 大橋乙羽君著 增補 **千山萬水** 全一冊洋裝小判紙數七百二頁色制寫眞版百廿景挿入 正價金五拾錢 小包料金八錢
- 賜覽天 同君著 **續千山萬水** 全一冊洋裝小判紙 六百五十頁色刷寫眞版百廿景挿入 正價金五拾錢 小包料金八錢
- 同君編 **紀行文集** 全一冊洋裝中判 洋布上製背皮 紙數千三十四頁 正價金六拾錢 小包料拾貳錢
- 岸上質軒君校訂 **續紀行文集** 全一冊洋裝中判 洋布上製背皮 紙數千六頁 正價金六拾錢 小包料拾貳錢

發兌元 東京本町 博文館

GYOKUEI-DO
玉英堂
東京